

に、亦他人が彼の爲に祈らんことを求めて居つた。彼の書翰に、「我らのために祈れ。」
(テサ前五・二五)又は「我がためにも祈れ。」(エペ六・二〇)などいふ文字が、屢々見出されるのは、その事を示すものである。(一七七)

◎ラブ・シャケは、アツスリヤの王をその出陣先に訪ね、事の成行を報告すると、アツスリヤの王は更に使者をヒゼキヤに遣り、「汝、エルサレムは、アツスリヤの王の手
に陥らじと言ひて、汝が頼むところの神に欺かるゝなかれ。汝はアツスリヤの王等が、
萬の國々になしたるところの事を知る。即ちこれを滅しつくせしなり。然れば汝いか
で救からんや」といはしめた。どこまでも神を蔑如にし、人を侮る申分であつた。け
れども神は「己が爲にヤコブをえらみ、イスラエルをえらみて、その珍寶となし給ふ」
(詩一三五・四)たのである。「エホバ其の御意にかなふことを、天にも地にも海にも淵にも、
みな悉く行ひ給ふ」(詩一三五・六)のである。他の神々が如何に頼みがたいにもせよ、
私共の神ばかりは、恩恵と能力とに富んだ神にて、私共を一切の艱難と禍害とより
救ひ出し給ふのである。(一八一―一三)

◎ヒゼキヤは、アツスリヤの王からの書翰を受取り、それを携へてエホバの家にのぼ
りゆき、その書翰をそこに擴げて、その中に認められた難問題に對する神の助と導
とを求めた。その如く私共も、自分でもてあます難問題に接したやうな場合に、そ
れをそのまま神の御前に持出して、その御助を求めることが出来る。「何事をも思ひ煩
ふな、たゞ事ごととに祈をなし、願をなし、感謝して、汝らの求を神に告げよ。さらば
凡て人の思にすぐる神の平安は、汝らの心と思とを基督耶穌によりて守らん。」(ペリ四・
六、七)といふやうな御約束もあるからである。かくして私共は一切萬事を神に訴
へ、その導と助とを受くることを知る故、如何なる書翰を受取り、又は難問題を持
ちかけられても、更に屈託する所がないのである。「彼は悪しき音信によりて畏れず、
その心エホバに依頼みてさだまされり。」(詩一二・七)とあるのは、それである。(一四一―一九)
◎預言者イザヤは神の御旨のある所を、ヒゼキヤにいひ遣つた。すなはちヒゼキヤの
祈については、「エホバかく言ひたまふ、汝がセナケリブの事につきて、我に祈るとこ
ろの事は、我これを聴けり。」といひ、アツスリヤの王については、神がその傲慢不遜

を罪し、「汝の怒りくるふ事と、汝の傲慢るところの事、上りてわが耳にいられば、我
 圈を汝の鼻につけ、轡を汝の唇にほどこして、汝を元來し道へひきかへすべし。」と
 宣ひ、ユダの人民については、「一年は穡を食ひ、第二年には又その穡を食ふあら
 ん。第三年には汝ら稼くことをし、穡ることをし、又葡萄園をつくりて、その果を食
 ふべし。」というて給ふ由を、告げ示したのである。他の場合に、「すべてエホバをよ
 ぶもの、誠をもて之をよぶものに、エホバは近くましますなり。エホバは己をおそ
 るもの、願望をみちたらしめ、その號呼をきいて之をすくひたまふ。エホバはおのれ
 を愛しむものをすべて守りたまへど、悪しき者をことごとく滅したまはん。」(詩一四五・
 一八一・二〇) と教へてあるのも、思ひ合さるゝのである。(二〇一・二九)

◎「ユダの家の逃れて遺れる者は、復根を下に張り、實を上につくばん」とあり。神に
 逆ふ者の生活は、根のない草の如きものである。「かれらは、長たざる前に枯るゝ屋上
 の草のごとし。」(詩一二九・六) 然しながら神の聖徒の生活は、その根を基督に置くもので
 ある。(コロニ・七) したがつて彼等の生活は、果を結ぶ生活である。耶蘇の御言に、「汝

らの往きて果を結び、且その果の残らんために、又おほよそ我が名によりて父に求む
 るものを、父の賜はんために汝らを立てたり。」(ヨハ一五・一六)とあるのは、それである。
 こゝに尙、「エホバの熱心これを爲すべし」とあり、私共の神は熱心家である。熱心を
 以てその民を保護し、之を救ひ、又潔めて、その御旨を行はせ給ふのである。有難い
 ことではないか。(三〇一・三四)

◎エホバの使者はいでて、アツスリヤ人十八萬五千人を、一夜のうちに撃ち殺した。
 これは曾てエジプトにて、バロの宮庭から茅屋の人民に至るまで、各家族の長子を、
 一夜のうちに悉く殺されたのと似た出来事であつた。(出一二・一二) アツスリヤの王セ
 ナケリブは、幸に免れて首都ニネベに歸つたのであるが、間もなくその子等の爲に殺
 された。また憫れな最期を遂げたものといはねばならぬ。「もろもろの君によりたのむ
 ことなく、人の子によりたのむなかれ。彼等に助あることなし。その氣息いでゆけば
 かれ土にかへる。その目かれがもろもろの企圖はほろびん。ヤコブの神をおのが助と
 し、その望をおのが神エホバにおくものは幸福なり、此はあめつちと海とそのなかな

るあらゆるものを造り、とこしへに眞實をまもり、虐げらるゝ者のために審判をおこなひ、饑乏たる者に食物をあたへ給ふ神なり。(詩一四六・三十七)とあるのは、いつまでも變らぬ眞理である。(三五―三七)

二〇 七ゼキヤ(三)

(列王紀略下第二十章)

一當時ヒゼキヤ病みて死なんとせしことあり。アモ少の子預言者イザヤ、彼の許に至りて之にいひけるは、エホバかく言ひたまふ、汝家の人に遺命をなせ。汝は死なん。生くることを得じと。二是に於てヒゼキヤその面を壁にむけてエホバに祈り、三嗚呼エホバよ、願くは我が眞實と一心をもて汝の前にあゆみ、汝の目に適ふことを行ひしを記憶たまへと、言ひて、痛く泣けり。四かくてイザヤ未だ中の邑を出はなれざる間に、エホバの言これに臨みて言ふ、五汝

還りてわが民の君ヒゼキヤに告げよ。汝の父ダビデの神エホバかく言ふ、我汝の祈禱を聴けり。汝の涙を看たり。然れば汝を愈すべし。第三日には汝エホバの家に入らん。六我汝の齡を十五年増すべし。我汝と此邑とをアツスリヤの王の手より救ひ、我名のため又わが僕ダビデのためにこの邑を守らんと。七是に於てイザヤ乾無花果の團塊壹個を持來れと言ひければ、すなはち之を持來りてその腫物に貼けたれば、ヒゼキヤ愈えぬ。八ヒゼキヤ、イザヤに言ひ

けるは、エホバが我を愈したまふ事と、第三日に我がエホバの家にのぼりゆく事とにつきては何の徴あるや。九イザヤ言ひけるは、エホバがその言ひしところを爲し給はん事につきては、汝エホバよりこの徴を得ん。日影進めること十度なり。若日影十度退かば如何。一〇ヒゼキヤ答へけるは、日影の十度進むは易き事なり。然せざれ。日影を十度しりぞかしめよ。二是において預言者イザヤ、エホバに願ははりければ、アハズの日昇の上に進みし日影を十度しりぞかしめたまへり。三その頃バラダンの子なるバビロンの王メロダクバラダン、書および禮物をヒゼキヤにおくれり。是はヒゼキヤの疾みなるを聞ききたればなり。四ヒゼキヤ之がために喜び、その寶物の庫、金、銀、香物、貴き膏、および武器庫、ならびにその府庫にあるところの一切の物を之に見せたり。その家にある物も、その國の中にある物も、何一箇としてヒゼキヤが彼等に見せざる者はなかり

き。一四茲に預言者イザヤ、ヒゼキヤ王のもとに來りて、これに言ひけるは、夫の人々は何を言ひしや。何處より來りしや。ヒゼキヤ言ひけるは、彼等は遠き國より即ちバビロンより來れり。一五イザヤ言ふ、彼等は汝の家にて何を見しや。ヒゼキヤ答へて云ふ、吾家にある物は皆かれら之を見たり。我庫の中には我がかれに見せざる者なきなり。一六イザヤすなはちヒゼキヤに言ひけるは、汝エホバの言を聞け。一七エホバ言ひたまふ、視よ、日いたる。凡て汝の家にある物および汝の先祖等が今日までに積蓄へたる物は、バビロンに携ちゆかれん。遺る者なかるべし。一八汝の身より出づる汝の生んところの子等の中を、彼等携へ去らん。其等はバビロンの王の殿において官吏となるべし。一九ヒゼキヤ、イザヤに言ふ、汝が語れるエホバの言は善し。又いふ、若わが世にある間に太平と眞實とあらば善きにあらずや。二〇ヒゼキヤのその餘の行爲その能、およびその池塘と水

道を作りて水を邑にひきし事は、ユダの王の歴代志の書にしるさるゝにあらざや。二ヒゼキヤその先

祖等とともに寝りて、その子マナセこれに代りて王となれり。

◎ヒゼキヤが王位に即いたのは、彼が二十五歳の時であつた。(列下一八・二)それから三四年を経て、彼が四十歳に手の届かうとする間際のことであつたが、神は預言者イザヤを彼の許に遣り、その幾程もなく病を得て死ぬべきことを告げ示し給ふと、彼はそれを聞いて神に祈をさしげつゝ、痛く泣いたとある。「老少不定」とは昔からいひ舊された所であれど、それにしても當時のヒゼキヤの如き、内治外交、その他百般の國事に油の乗つた壯年者が、忽ち世を去らねばならぬとあつては、彼の驚きも亦想像するに難くない。或人の詩に、「早かれ晩かれ、凡ての人は去り行く。一人だも留まる者なし。國王も乞食と歩調をそろへて、死出の旅路に急ぐ。」というてある。此の如く私共は、どうせ間もなく世を去らねばならないものとすれば、此の世に居る間を神の御旨にかなうて、最も有意義に過したきものである。又豫々永遠の生命に到る用意を調べてゐたきものである。(一一三)

◎神はヒゼキヤの心からなる願を受納れ、再びイザヤを彼の許にあくり、「汝の父ダビデの神エホバかく言ふ、我汝の祈禱を聴けり。汝の涙を看たり。然れば汝を愈すべし。第三日には汝エホバの家に入らん。我汝の齡を十五年増すべし。」と傳へしめ給うた。病氣と信仰との關係については、基督に救はれた者は不養生をせず、不身持をせず、又徒なる思ひ煩ひをしない故に、たゞそれだけでも多くの病に罹ることを免かるべく、たまたま罹つても速に快方に至るべき理由がある。その上に神はその御名を呼ぶ者を顧みて、不思議に彼等の病を癒し給ふ例は多くある。「信仰の祈は病める者を救はん。主かれを起し給はん。」(ヤコ五・一五)などであるのは、それである。但し場合によつては、神の聖徒が病苦によつて鍛へられ、又は病苦を通じて御榮をあらはさん爲に、態とその肉體上の苦痛を忍ばせらるゝやうなこともあり。すなはちパウロが、その肉體に與へられた一つの刺を取去られん爲に、三度神に祈つたけれども、聞き入れられず、反つて、「わが恩恵なんちに足れり。わが能力は弱きうちに全うせらるればなり。」(コリ後二・九)と仰せられた如きは、その實例である。(四一六)

◎イザヤは神の命により、乾無花果の團塊壹個をとつて、ヒゼキヤが惱まざる、腫物の上に貼けると、彼の病は癒えたのである。人の病を癒す者は神であれど、その神は又、屢々醫者や藥の如きものを、治療の手段として用ひ給ふことがある。それ故耶蘇は、「健全なる者は醫者を要せず、たゞ病める者これを要す。」(マタ九・一二)と仰せられ、その隣人愛を教ふる譬話に於ては、所謂善きサマリア人が、半死半生の怪我人を見出した時、「近寄りて油と葡萄酒とを注ぎ、傷を包み」(ルカ一〇・三四)などしたと、説いてゐ給ふ。私共は神の癒を信ずると共に、またその備へたまへる醫療の法を試みたかといつて、決して悪からう筈はないのである。(七)

◎「預言者イザヤ、エホバに願はりければ、アハズの日晷の上に進みし日影を、十度しりぞかしたまへり。」とあり。之を信仰的に解釋すれば、日影を後へ戻したといふのは、失はれた時を贖ふことを意味する。即ち無駄に過した生活が、基督によつて贖はれ、爾來これまでの埋合として、うつて變つた、有用のものとなることを暗示する。我が汝らに遣し、大軍、すなはち群むる蝗、なめつくす蝗、喫ひほろぼす蝗、

噬みくらふ蝗の蝕ひあらせる年を、我汝らに賠はん。(ヨエ二・二五)などあるのも、參考すべきである。英國の一貴婦人が金のあるにまかせ、贅澤をしながら世界を周遊し、殆んど全生涯を空しく過したる時、或人の導により、悔改めて基督の救をうけ、それから最後の十二年間、持辨當で救世軍の婦人ホームに通ひ、そこに收容せらるゝ不幸な婦人たちの爲に、種々盡瘁する所があつた。その死ぬる前に彼女は「た。耶蘇はパンの奇蹟の後、その残の屑を拾はせ給ふと、それが十二の籠に満ちたとある。今私は耶蘇の恵により、その空しく過さんとした一生の、残の屑の十二年を拾ひ上げることが出来たのは、眞に感謝の至である」と。此の如きは所謂過ぎ去つた日影を、後へ戻された一例とも見ることが出来る。(九一―二)

◎こゝにはじめて、バビロン王の記事に接するのである。そのはじめバビロンはアツスリヤの配下(列下一七・二四)それが段々強大となつて、アツスリヤの支配を免かれ、一國民として立つたのみならず、遂にはアツスリヤをも、その屬國とするほど、優勢になつた。バビロンの王メロダク・バラダンは、使者を遣して、書翰及び禮物を

ヒゼキヤにおくり、その病氣の全快したことを祝うた。然るに此の度、ヒゼキヤが、不思議に健康を恢復したわけは、全く神の力と、イザヤの執成とによるのであるから、本當のことをいへば、ヒゼキヤはバビロン王の使者に、神のことを語り、又預言者イザヤを紹介してこそ、然るべきであつたらうに、それには心付かないで、たゞその豫て蓄ふる所の寶物、又は武器などを取出し、誇りがに示したといふのは、至つて賢からぬ仕方であつた。此の如きは單にバビロン王の好奇心を誘ひ、その貪慾の念を挑發し、いつか好き機會を得て、それらの物を分捕りたいと、願はしむるものに過ぎなかつた。その如く今日の私共も亦、遠來の珍客をもてなすやうな場合に、たゞ漫然と、物質上の富を誇示するのではなく、それよりも以上に、機を捉へて、靈魂の救主なる耶蘇を證せんことを、心掛くべきである。「基督の測るべからざる富」(エヘ三・八)にまさつて、誇示するに足る富は、他にないからである。(二二一九)

◎ヒゼキヤが一生に成したる、功業の一つは「その池塘と水道を作りて、水を邑にひきし事」であつた。エルサレムは、水利のよくない所であつたから、彼が水道を作つ

て水を邑にひいたことは、人民の爲に大なる利便となつたのである。けれども後に耶蘇は仰せられた。「すべて此の水をのむ者は、また渴かん。然れど我があたふる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが與ふる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし。」(ヨハ四・一三、一四)と。私共は銘々その中に、永遠の生命の水の湧きいづる、泉源を所有してゐるやうでありたい。(二〇、二二)

二二 マ ナ セ

(列王紀略下第二十一章)

一 マナセ十二歳にして王となり、五十五年の間エルサレムにて世を治めたり。その母の名はヘフジバといふ。ニマナセはエホバの目の前に惡をなし、エホバがイスラエルの子孫の前より逐ひはらひ給ひし、國々の人がなすところの憎むべき事に倣へり。三彼はその父ヒゼキヤが毀ちたる崇邱を改め築き、又

イスラエルの王アハブのなせしごとく、バアルのために祭壇を築き、アシラ像を作り、且天の衆群を拜みてこれに事へ、四またエホバの家の中に數箇の祭壇を築けり。是はエホバがこれをさして、我わが名をエルサレムにおかんと言ひたまひし家なり。五彼エホバの家の二の庭に祭壇を築き、六またその子に

火の中を通らしめ、占卜をなし、魔術をおこなひ、口寄者と卜筮師を取もちひ、エホバの目の前に衆多の悪を爲して、其震怒を惹き起せり。七彼はその作りしアシラの銅像を殿にたてたり。エホバの殿につきてダビデとその子ソロモンに言ひたまひしことあり。云く、我この家と我がイスラエルの諸の支流の中より選みたるエルサレムとに、吾名を永久におかん。八彼等もし我が凡てこれに命ぜし事、わが僕モーセがこれに命ぜし一切の律法を、謹みて行はば、我これが足をして、わがその先祖等に與へし地より重れてさまよひ出づることなからしむべしと。九然るに彼等は聽くことをせざりき。マナセが人々を誘ひて悪をなせしことは、エホバがイスラエルの子孫の前に滅したまひし國々の人よりも甚だしかりき。一〇是においてエホバその僕なる預言者等をもて語りて言給はく、一ユダの王マナセ之らの憎むべき事を行ひ、その前にありしアモリ人の凡て爲せ

し所にも踰えたる悪をなし、亦ユダをしてその偶像をもて罪を犯させたれば、二イスラエルの神エホバかく言ふ、視よ、我エルサレムとユダに災害をくだす。是を聞く者はその耳ふたつながら鳴らん。三我サマリアを量りし繩とアハアの家にもちひし準繩を、エルサレムにほどし、人が血を拭ひ、これを拭ひて反覆がごとくに、エルサレムを拭ひさらん。四我わが産業の民の残餘を棄て、これをその敵の手に付さん。彼等はその諸の敵の擄掠にあひ、掠奪にあふべし。五是は彼等その先祖等がエジプトより出し日より今日にいたるまで、吾目の前に悪をおこなひて我を怒らするが故なり。一六マナセはエホバの目の前に悪をおこなひて、ユダに罪を犯させたる上に、また無辜者の血を多く流して、エルサレムのこの極ふりかの極にまで盈せり。一七マナセのその餘の行爲とその凡て爲したる事、およびその犯したる罪は、ユダの王の歴代志の書に記さるゝにあらず

や。一八マナセその先祖等とともに寝りて、その家の園すなはちウザの園に葬られ、その子アモンこれに代りて王となれり。一九アモンは王となれる時十二歳にして、エルサレムにおいて二年世を治めたり。その母はヨテバのハルツの女にして、その名をメシユレメテと云ふ。二〇アモンはその父マナセのなせしごとくエホバの目の前に悪をなせり。二一すなはち彼は凡てその父のあゆみし道にあゆみ、その父の事へし偶像に事へてこれを拜み、二二その先祖

等の神エホバを棄て、エホバの道にあゆまざりき。二三茲にアモンの臣僕等黨をむすびて王をその家に弑したりしが、二四國の民そのアモン王に敵して黨を結びし者ごとくく撃ちころせり。而して國の民アモンの子ヨアシを王となしてそれに代らしむ。二五アモンのなしたるその餘の行爲は、ユダの王の歴代志の書に記さるゝにあらずや。二六アモンはウザの園にてその墓に葬られ、その子ヨアシこれに代りて王となれり。

◎マナセは十二歳にして王となり、五十五年のあひだ世を治めた。これはユダの王等のうち、最も長い治世であつた。然るにマナセはその長い治世の間、エホバの目の前に悪をなし、エホバがイスラエルの子孫の前より逐ひはらひ給ひし國々の人がなすところの、憎むべき事に倣へり。とあり。これでは折角の長い治世も、一向役に立たないのである。反つてそれが長かつただけ、それだけ、誼はしいものとなつた位のことである。元來人の壽命は、その年數によつて計算せらるべきものでなく、其の人がど

れだけ、善事を^{ぜんじ}行^{おこな}うたかといふ分量^{ぶんりやう}によつて、考^{かう}察^{さつ}せらるべきものである。『いのち長ければ恥多し』といふこともある如く、たとひ長く生きても、たゞ罪惡^{ざいあく}を重ねるのであれば、眞^{しん}に恥^{はづ}かしいことの至^{いた}りである。トマス・フーラーが、「善く生きたのは、長く生きたのである」というたのは、意味深^{いみふか}き言^{ことば}であると思^{おも}ふ。(一、二)

◎マナセの爲したる所は、悉く道に外れたことのみであつた。第一、彼はその父ヒゼキヤが毀ちたる崇^{たか}邱^{きやう}を改^{あらた}め築^{きつ}き、第二、バアルの爲に祭壇^{さいだん}を設^まけ、第三、アシラ像をつくり、第四、天の集^し群^{ぐん}(星のことである)を拜^{をが}みて之に事^{つか}へ、第五、エホバの家の二つの庭に祭壇^{さいだん}を築^{きつ}き、第六、又その子に火の中を通らしめ、第七、占^う卜^らをなし、第八、魔術^{まじゆつ}を行^{おこな}ひ、第九、口寄者^{くちよせ}を近づ^{ちか}げ、第十、卜筮師^{うらなひし}をとりもちひ、「エホバの目の前に衆多^{おほく}の惡^{あく}を爲^なして、其の震怒^{いかり}を惹起^{ひきおこ}し」たのである。かくして彼の父ヒゼキヤが折角^{せつかく}行^{おこな}うた改^{かい}革^{かく}も、殘^{のこ}らず粉^{こな}碎^{さい}せられたのである。眞^{しん}に不肖^{ふせう}の子といはるべきものであつた。(三一六)

◎エバは禁斷^{きんだん}の果實^{このみ}を自^じ分^{ぶん}で食^{くら}うたのみか、直^すに又^{また}之^{これ}を、己^{おのれ}と偕^{とも}なる夫^{をつと}に與^{あた}へて、食^{くら}

はしめたといふことである。(創三・六) 此の如く罪人は、自分で罪を犯すのみならず、亦他人^{またたにん}を誘^{いざな}うて同^{おな}じ罪^{つみ}を犯^{おか}さしむる故^{ゆゑ}、殊^{こと}に油斷^{ゆだん}がならないのである。こゝに、「マナセが人々^{ひとびと}を誘^{いざな}ひて惡^{あく}をなせしことは、エホバがイスラエルの子孫^{ひそん}の前に、滅^{ほろ}したまひし國々^{くにくに}の人^{ひと}よりも、甚^{はな}だしかりき。」とあり。マナセは自分一人^{じぶんひとり}で、重ね重ねの罪を犯すのみならず、その國民^{こくみん}を誘^{いざな}うて、更に同様の罪^{つみ}を犯^{おか}さしめた。所謂「上の好むところ、下必ず之より甚^{はな}だしきものある」道理^{だうり}で、人の上に立つ者の惡^あしき行^{おこなひ}は、その下に屬^{ぞく}する人々に、多大^{ただい}の惡感化^{あくかんくわ}を及^{およ}ぼすものであるから、それを心得^{こころえ}て、用心^{ようじん}する所^{ところ}がなくてはならぬ。(七一九)

◎神はその僕なる預言者等^{よげんしやたち}を用^{もち}ひて、人民^{じんみん}を戒^{いまし}め給^{たま}うた。その當時^{たうじ}の預言者^{よげんしや}といふのは、ホゼア、ヨエル、ナホム、ハバクク、イザヤ等^らがそれであつた。マナセは神の憎^{にく}み給^{たま}ふ事^{こと}を行^{おこな}ひ、アモリ人の凡^{すべ}て爲^なしたる所^{ところ}よりも踰^こえたる惡^{あく}をなし、ユダをしてその偶像^{ぐうざう}をもて罪^{つみ}を犯^{おか}さしめた故^{ゆゑ}、神はそのサマリアを量^{はか}りし繩^{なは}と、アハブの家にもちひし準繩^{さじかり}とを、エルサレムにほどこし、人が皿^{さら}を洗^{あら}うてその汚物^{をぶつ}を拭^{ぬぐ}ひ去^さる如^{ごと}く、エ

ルサレムの民を拭うて、之を敵國に移し、その俘囚とならしむるとの御旨であつた。實に「罪の拂ふ價は死である。」(ロマ六・二三)「如何なる力も、死を罪よりひきはなすと能はず」(ミルトン)とは、眞實のことである。(一〇一―一六)

◎歴代志略記者のいふ所によれば、さすがのマナセも、さうした災難に惱まざるゝに及び、到頭我を折つてその神エホバを和め、(歴下三三・一二、一三)その前に大に身を卑うして悔改めた故、神はその祈を聽き入れ、今一度之をエルサレムにかへして、國に莅ましめ給うたといふことである。彼は多く比なき程に罪惡を犯した。それにも拘らず、彼が幼い頃、その父ヒゼキヤから受けた宗教上の感化は、尙何處かに残つて居つたものと見え、一旦翻然としてその罪を認め、神を呼ぶに至つたのは、嬉しいことである。モニカがその愛子アウガスチンの爲に憂へて、日夜涙の祈をつゞけて居るのを、その師父アンブローズが見て同情に堪へず、「涙の子は亡びない」というて之を激勵したが、果してモニカの祈は聽かれ、間もなくアウガスチンは悔改めて、後つひにあれ程の聖徒となつた。こゝにマナセが散々の罪惡を重ねたる後、それでもつひに神に立

歸つたのを見れば、「涙の子は亡びない」のである。祈をこめて育てた子は、決して全く神から離るゝことは出来ないものと思ひ、氣を勵まして我が子の爲に祈り、又盡さねばならぬ。マナセが死んだ時、その先祖たちと共に葬られず、「その家の園、すなはちウザの園に葬られ」たとあるのは、彼が自らその罪を恥ぢ、わざと遠慮して、斯は取計らはしめたのであらう、といふことである。彼の悔改は遅かつた。然しながら遅くとも、悔改めないに勝る萬々であつたのは、申す迄もない。(一七、一八)

◎マナセについて王となつた其の子アモンは、その父マナセのなしく如く、エホバの目の前に惡を行つた。けれども「その父マナセが身を卑くせし如く、エホバの前に身を卑くすることを爲ざりき。」とあり。つまり彼は親の缺點、弱點、汚點を悉く傳へたけれども、その美點は之を學ぶに至らなかつたのである。彼は間もなくその臣下の殺す所となり、惘然の最期を遂げたのである。(一九―二六)

(列王紀略下第二十二章)

一 ヨシアは八歳にして王となり、エルサレムにおいて三十一歳を治めたり。其母はボヅカテのアダヤの女にして、名をエデダと曰ふ。ニヨシアはエホバの目に適ふ事をなし、其父ダビデの道にあゆみて、右にも左にも轉らざりき。三ヨシア王の十八年に、王メシユラムの子アザリヤの子なる書記官シヤパンをエホバの家に遣せり。即ちこれに言ひけらく、四汝祭司の長ヒルキヤの許にのぼり行きて、エホバの家にいりし銀、すなはち門守が民よりあつめし者を彼に計算へしめ、五工事を司るエホバの家の監督者の手にこれを付さしめ、而してまた彼らをしてエホバの家にありて工事をなすところの者にこれを付さしめ、殿の破壊を修理はしめよ。六即ち工匠と建

築者と石工にこれを付さしめ、又これをもて殿を修理ふ材木と斫石を買はしむべし。七但し彼らは誠實に事をなせば、彼らの手にわたすところの銀の計算をかれらとするには及ばざるなり。八時に祭司の長ヒルキヤ、書記官シヤパンに言ひけるは、我エホバの家において律法の書を見いだせりと。ヒルキヤすなはちその書をシヤパンにわたしたれば、彼これを讀めり。九かくて書記官シヤパン王の許に至り、王に返事をして言ふ、僕等殿にありし金を打あけて、これを工事を司るエホバの家の監督者の手に付せりと。一〇書記官シヤパンまた王につけて祭司ヒルキヤ我に一書をわたせりと言ひ、シヤパン其を王の前に讀みけるに、一二王その律法の書の言を聞くや、

その衣を裂けり。一三而して王祭司ヒルキヤと、シヤパンの子アヒカムと、ミカヤの子アクホルと、書記官シヤパンと、王の内臣アサヤとに命じて言ふ、一三 汝等往きてこの見當りし書の言につきて、我のため民のためユダ全國のためにエホバに問へ、其は我等の先祖等は此の書の言に聽きたがひて、その凡て我等の爲に記されたるところを行ふことをせざりしに因りて、エホバの我等にむかひて怒を發したまふこと甚だしかるべければなり。一四是において祭司ヒルキヤ、アヒカム、アクホル、シヤパン、およびアサヤ等、シャルムの妻なる女預言者ホルダの許にいたれり。シャルムはハルハスの子なるテクワの子にして、衣裳の室を守る者なり。時にホルダはエルサレムの下邑に住みたる。彼等すなはちホルダに物語せしかば、一五ホルダ彼等に言ひけるは、イスラエルの神エホバかく言ひたまふ、汝等を我に遣せる人に告げよ。一六エホバかく言ふ、我ユダの王

が讀みたるかの書の一切の言にしたがひて災害をこの處と此にすめる民に降さんとす。一七彼等は我を棄てて他の神に香を焚き、その手に作れる諸の物をもて我を怒らすなり。是故に我この處にむかひて怒の火を發す。是は滅えざるべし。一八但し汝等をつかはして我に問はしむるユダの王には、汝等かく言ふべし。汝が聞ける言につきて、イスラエルの神エホバかく言ひたまふ。一九汝はわが此處と此にすめる民にむかひて、是は荒地となり、呪詛とならんと言ひしを聞きたる時に、心柔にしてエホバの前に身を卑くし、衣を裂きて吾前に泣きたれば、我もまた聽くことをなすなり。エホバ之を言ふ。二〇然れば視よ、我なんぢを汝の先祖等に歸せしめん。汝は安全に墓に歸することなうべし。汝はわが此處にくだす諸の災害を目に見ることあらじと。彼等すなはち王に返事なすしぬ。

◎ヨシアは八歳の時、位に即き、三十一年間世を治めた。歴代志略によれば、尙若かりしかども、その治世の八年にその父ダビデの神を求むることを始め、その十二年には崇邱、アシラ像、刻みたる像、鑄たる像などを除きて、ユダとエルサレムを潔むることを始め、たとあり。すなはち彼は十六歳にして信仰生活に入り、二十歳にして宗教上の改革に着手したことが、知らるゝのである。青年の意氣は眞にたふといものである。人はその弱年の間に、速に神を求め、神に奉仕することを始むるに如くはない。青年の時代は道に志すべき時代である。又基督の側に就いて、その御軍を戦ひ始むべき時代である。なんぢ年若きをもて人に輕んぜらるな、反つて言にも、行狀にも、愛にも、信仰にも、潔にも、信者の模範となれ。(テモ前四・一二)とは、いつの代にも、青年に極めて適切なる忠告であると思ふ。(一、二)

◎ヨシアは二十六歳の時、エホバの家の修理に取掛つた。これは前にヨアシがなしたるところを、學んだものゝ如く見える。(列下二・九一―九五)人はその自らの爲に、居心地のよい住居を設くることを知る位であつたら、それと同時に亦、神を禮拜する爲の會堂、又は會館の設備について、注意を拂ふべき筈である。アシシのフランシスは、その身を獻げて神への奉仕に入るや、何よりも先づ最寄の破損した會堂の修復を思ひたち、引續き數箇の會堂を修繕したといふではないか。(三一七)

◎エホバの家の修理に取掛つた際、祭司の長ヒルキヤは、圖らず其處にて、律法の書を見出した。此の頃迄、エホバの家が偶像にて穢されたやうなことも毎度あり。したがつて契約の櫃の傍に置かれた律法の書も、(申三一・二四―二六)何處にか紛れ込んで居つたのを、ヒルキヤが偶然に、發見したものらしいのである。ヒルキヤは之を書記官シヤパンに渡すと、シヤパンはまたそれを携へて、王の前に出で、これを朗讀するのを聞き、王はいたく胸をうたれ、その衣を裂いたとある。その如く凡て眞の基督者に最も大切なるは、神の御言なる聖書を愛讀することである。今から百四十年前、印刷術の甚だ幼稚で、聖書の部數もまだ至つて少い頃、ウエールズにメリー・ジョーンズといふ十六歳の少女があり。御言を讀みたくなると、二哩先の知人を訪ね、その所有する聖書を讀ませて貰うた。そのうち彼女は是非自分でも、一部手に入れたいと願か

ら、數月間、日夜機業をはげみ、相當の貯金が出来たので、それを携へて二十五哩先の一牧師を訪ね、聖書を賣らんことを求めた。折柄その牧師の許には數部の聖書があつたが、皆約束済である由を聞いて、メリーは泣いた。牧師はその眞實に心動き、無理に都合つけて一部の聖書を彼女に賣つたが、この少女の熱心のことゝが傳へられて、それが動機となり、遂に今日の大英國聖書會社を創立せらるゝに至つた、といふことである。お互にもつと、聖書を愛讀したきものである。(八一—二)

◎ヨシアは祭司及び數人の高官に命じ、「汝等往きて、この見當りし書の言につきて、我のため、民のため、ユダ全國のためにエホバに問へ云々」というた。聖書の教は之を個人の身の上に當嵌め、又國民の生活に照し鑑むべきものである。これはたゞ眼にて讀み、耳にて聞くのみならず、之をその身に引當て、學び、又行ふことが緊要である。耶蘇の御言にも、「されば、凡て我がこれらの言をきゝて行ふ者を、磐の上に家をたてたる慧き人に擬へん。雨ふり流漲り、風ふきて其の家をうてど倒れず。これ磐の上に建てられたる故なり。すべて我がこれらの言をきゝて行はぬ者を、沙の上に家を建てたる愚なる人に擬へん。雨ふり流漲り、風ふきて其の家をうてば、倒れてその顛倒はなはだし。」(マタ七・二四—二七) といつてあるではないか。(一一、一三)

◎祭司ヒルキヤと大官たちとは、シャルムの妻なる女預言者ホルダを訪うたとあり。その頃はエレミヤをはじめとして、世に知られた預言者も少くなかつた筈である。然るに彼等が、殊に女預言者ホルダを訪れたのを見れば、彼女が如何に彼等から尊信せられて居つたかを、察するに足るのである。聖書にある女預言者といへば、ミリアム、(出一五・二〇) デボラ、(士四・四) ノアデヤ、(ネへ六・一四) イザヤの妻、(イザ八・三) アンナ、(ルカ二・三六) ビリポの女、(使二・九) 等があり。マグダラのマリヤは誰よりも早く復活の主に見え、これをその弟子たちに告ぐべきことを、命ぜられたやうな例もある。(マタ二八・七) 神は男子を用ふる如く、又婦人を用ひて、その御旨を世に傳へしめ給ふのである。(一四—一七)

◎ユダの人民はその罪惡のために、大なる災害を蒙むるべき日が近づいて居つた。それにも拘らず、神はヨシアが心柔にしてエホバの前に身を卑くし、衣を裂いて、そ

の前に泣いたのを見て、之を憫み、彼が生くるあひだは、その國民に來るべきさまざま
 まの呪詛を、眼に見ざらしめ給ふとの御旨であつた。その如く神は私共の涙の祈を
 顧み給ふお方である。詩篇の作者が神に向ひ「なんぢの革囊にわが涙をたくはへたま
 へ。こは皆なんぢの冊にしるしあるにあらずや。(詩五六・八) といふたのは、それであ
 る。こゝに「視よ、我なんぢを汝の先祖等に歸せしめん。汝は安全に墓に歸すること
 を得べし。」と仰せられたにも拘らず、數年の後ヨシアは、戦場にて討死を遂げた。そ
 れでも尙、彼は安全に墓に歸したといへるか、と訝る人もあらうが、それはいひ得る
 のである。彼の如く神を知る者は、病床に死んだにせよ、又は戦場に斃れたにせよ、
 いづれ、安心して死んだことだけは、間違ないのである。すなはち預言者イザヤの書
 に、「かれは平安にいり、直きをおこなふ者はその寐床にやすめり。(イザ五七・二)とある
 のは、斯る場合に當嵌る御言であると思ふ。(一八一・二〇)

二三 ヨシア (二)

(列王紀略下第二十三章)

一是において王、人をつかはしてユダとエルサレム
 の長老をことごとく集め、二而して王エホバの家に
 のぼれり。ユダの諸の人々エルサレムの一切の民、
 および祭司預言者ならびに大小の民みな之にしたが
 ふ。王すなはちエホバの家にみたりし契約の書の
 言をことごとく彼等の耳に讀みさせ、三而して王
 高座の上に立ちてエホバの前に契約をなし、エホバ
 にしたがひて歩み、心をつくし、精神をつくして、
 その誠命と律法と法度を守り、此書に記されたる此
 契約の言をおこなはんと言へり。民みなその契約に
 加はりぬ。四かくして王祭司の長ヒルキヤと、その
 下にたつところの祭司等、および門守等に命じて、
 エホバの家よりしてバアルとアシラと天の衆群との

ために作りたる諸の器を執りいださしめ、エルサ
 レムの外にてキデロンの野にこれを焼き、その灰を
 ベテルに持ちゆかしめ、五又ユダの王等が立ててユ
 ダの邑々とエルサレムの四圍なる崇邱に香をたか
 しめたる祭司等を廢し、またバアルと日月星宿と天
 の衆群とに香を焚く者等をも廢せり。六彼またエホ
 バの家よりアシラ像をとりいだし、エルサレムの外
 に持ちゆきてキデロン川にいたり、キデロン川にお
 いてこれを焼き、これを打碎きて粉となし、その粉
 を民の墓に散らし、七またエホバの家の旁にある
 男娼の家を毀てり。其處はまた婦人がアシラのため
 に天幕を織るところなりき。八彼またユダの邑々よ
 り祭司をことごとく召しよせ、また祭司が香をたき

たる崇邱をばゲバよりベエルシバまでこれを汚し、また門にある崇邱を毀てり。是等の崇邱は一は邑の幸ヨシニアの門の入口にあり。一は邑の門にありて之に入る人の左にあたる。九崇邱の祭司等はエルサレムにおいてエホバの壇にのぼることをせざりき。但し彼等はその兄弟の中において無酔パンを食へり。一〇王また人がその子息女に火の中を通らしめて、之をモロクにさゝぐるることなからんために、ベンヒンノムの谷にあるトベテを汚し、一、またユダの王等が日のためにさへげてエホバの家の門における馬をうつせり。この馬はバルリムにある侍従ナタンメレクの室に在りしなり。彼また日の車を皆火に焚けり。一、またユダの王等がアハズの樓の屋脊につくりたる祭壇と、マセナがエホバの家の兩の庭につくりたる祭壇とは、王これを毀ち、これを其處より取りくづして、その碎片をキデロン川に投げ捨てたり。一三またイスラエルの王ソロモン

りて宣べたる神の人の墓なりと言ひければ、一八すなはち其には手をつくるなかれ。誰もその骨を移す勿れと言へり。是をもてその骨とサマリアより來りし預言者の骨には手をつけざりき。一九またイスラエルの王等がサマリアの邑々に造りて、エホバを怒らせし崇邱の家も、皆ヨシアこれを取りのぞき、凡てそのペテルになせしごとくに之に事をなせり。二〇彼また其處にある崇邱の祭司等を壇の上に殺し、人の骨を壇の上に焚きてエルサレムに歸りぬ。二一而して王一切の民に命じて言ふ、汝らの神エホバに逾越の節を執行ふべしと。二二士師のイスラエルを治めし日より已來もまた、ユダの王等とイスラエルの王等の代にも、斯のごとき逾越の節を守りしことはなかりしが、二三ヨシア王の十八年にいたりて、エルサレムにてこの逾越節をエホバに守りしなり。二四ヨシアまた祭司ヒルキヤがエホバの家にて

が、昔シドン人の憎むべき者なるアシタロテと、モアブ人の憎むべき者なるケモシと、アンモンの子孫の憎むべき者なるモロクのために、エルサレムの前に於いて殲滅山の右に築きたる崇邱も、王これを汚し、一四また諸の像をうち碎き、アシラ像をきりたふし、人の骨をもてその處々に充せり。一五またベテルにある壇かのイスラエルに罪を犯させたるネバテの子ヤラバアムが造りし崇邱、すなはちその壇もその崇邱も彼これを毀ち、その崇邱を焚きて之を粉にうち碎き、かつアシラ像を焚けり。一六茲にヨシア身を轉らして山に墓のあるを見、人をやりてその墓より骨をとりきたらしめ、之をその壇の上に焚きて其を汚せり。即ち神の人が宣べたるエホバの言のごとし。昔神の人この言語を宣べしことありしなり。一七ヨシアまた其處に見ゆる碑は何なるやと言ひしに、邑の人々これに告げて、其は汝がベテルの壇にむかひて爲せるこの事等を、ユダより來

見いだせし書に記されたる律法の言を世におこなはんとために、口寄者と卜筮師とテラヒムと偶像、およびユダの地とエルサレムに見ゆる諸の憎むべき者を取り除けり。二五ヨシアのごとくに心をつくし、精神をつくし、力をつくして、モーセの法に全くしたがひて、エホバに歸向せし王はヨシアの先にはあらざりき。またかれの後にも彼のごとき者はなし。二六斯有しかども、エホバはユダにむかひて怒を發したるその大なる燃えたつ震怒を息むることをしたまはざりき。是はマナセ諸の憤らしき事をもて、エホバを怒らせしによるなり。二七エホバすなはち言ひたまはく、我イスラエルを移せし如くに、ユダをわが目の前より拂ひ移し、我が選みし此エルサレムの邑と吾名をそこに置かんといひしこの殿とを棄つべしと。二八ヨシアのその餘の行爲とその凡て爲したる事は、ユダの王の歴代志の書に記さるゝにあらずや。二九ヨシアの代にエジプトの王パロネコ、

アツスリヤの王と戦はんとてユフラテ河をさして上り來しが、ヨシア王これを防がんとて進みゆきければ、彼これに出あひてメギドンにこれを殺せり。三〇その僕等すなはちこれが死骸を車にのせてメギドンよりエルサレムに持ちゆき、之をその墓に葬れり。國の民こゝに於てヨシアの子エホアハズを取り、これに膏をそそぎて王となして、その父にかはらしめたり。三一エホアハズは王となれる時二十三歳にして、エルサレムにて三月世を治めたり。その母はリブナのエレミヤの女にして、名をハムタルと云ふ。三二エホアハズはその先祖等が凡てなしたることとくに、エホバの目の前に悪をなせしが、三三パロネコ彼をハマテの地のリブラに繋ぎおきて、エルサレムにおいて王となりたることを得ざらしめ、且銀

◎ヨシアは、ユダとエルサレムとの代表的人民を、悉くエホバの家にあつめ、その新に見出したる契約の書を読んで聞かせ、今より心を盡し、精神を盡して、神の誠命と

律法と法度とを守り、その書に記されたる契約の言をおこなはんことを契約すると、人民も亦皆その契約に加はつた。其の如く神の御教を基本とする國家と人民とは、幸福である。アフリカの或る酋長が、ヰイクトリヤ女皇に見えた際、「英國が今日の隆盛をいたした秘訣は、何でありますか」と尋ねると、女皇は机の上にある一巻の聖書を手に取りて示しつゝ、「その秘訣は一切擧げて、この書の中に記してある故、之を熟讀玩味せられんことを望む」と答へられたさうである。(一三三)

◎かくて後、ヨシアは迷信と罪惡との一掃に取掛つた。今その主なるものを舉れば、第一、彼はエホバの家よりして、バアルと、アシラと、天の衆群とのために作りたる、諸の器を執りいださしめ、エルサレムの外なるキデロンの野にて焼き、その灰をベテルに持ちゆかしめた。第二、またユダの王等が崇邱に香をたかしめた祭司等を廢した。第三、彼は又、エホバの家の旁にある男娼の家を毀つた。第四、また人がその子息女に火の中を通らしめて、之をモロクにさゝぐるることなからんために、ベシヒノムの谷にあるトベテ(子供を焚殺する時、悲鳴を消す爲にたゞく太鼓に因んだ場所の名)を汚

百タラント、金一タラントの罰金を國に課したり。三四而してパロネコはヨシアの子エリヤキムをして其父ヨシアに代りて王とならしめ、彼の名をエホヤキムと改め、エホアハズを曳きて去りぬ。エホアハズはエジプトに至りて其處に死ねり。三五エホヤキムは金銀をパロにおくれり。即ち彼國に課してパロの命のまゝに金を出さしめ、國の民各人に割つけて金銀を征取りて、これをパロネコにおくれり。三六エホヤキムは二十五歳にして王となり、エルサレムにおいて十一年世を治めたり。その母はルマのメダヤの女にして、名をセアタと云ふ。三七エホヤキムはその先祖等が凡てなしたることとくに、エホバの目の前に悪をなせり。

した。第五、又ユダの王等が日の神のためにさしげ、エホバの家の門における馬を他にうつした。これらはその主なるものであつた。彼は極度まで一切の罪惡と迷信とを排斥せんと努めたのである。その及ぼせる感化は小さいものではなかつた。歴代志略の記者が「かくてヨシヤ、イスラエルの子孫に屬する一切の地より、憎むべき者を盡く取除き、イスラエルの有ゆる人をして、その神エホバに事ふまつらしめたり。ヨシヤの世にある目の間は、彼らその先祖の神エホバに従ひて離れざりき。」(歴下三四・三三)と記したのは、その有様であつた。(四一・四)

◎久しき以前に、ヤラベアムが祭壇の上に立ち、香を焚かんとする折しも、ユダからベテルに來つた神の人が現れ、エホバの言をもて壇に向うて呼ばはり「壇よ、壇よ、エホバ斯く言ひ給ふ、視よ、ダビデの家にヨシヤと名づくる一人の子生るべし。彼爾(壇)の上に香を焚く所の崇邱の祭司を、爾(壇)の上に獻げん、且人の骨爾(壇)の上に焼かれん。」(列上一三・二)といふたのは、三百七十年後の此の時に至りて、事實となつて現れたのである。ヨシヤはその預言のとほり、「崇邱の祭司等を壇の上に殺し、人

の骨を壇の上に焚き」など、したからである。此の如く神の言は時を経て遂には必ず成就するのである。「信ぜし者は幸福なるかな、主の語り給ふことは必ず成就すべければなり。」(ルカ一・四五)と、後にエリサベツがいうたのは、眞實のことである。(二五・二〇)

◎ヨシヤは民に命じて逾越節を守らしめた。これは士師のイスラエルを治めし日より已來、全く閑却せられて居つたのを、彼が執行はしめたものである。彼は又、新に見出した律法の言を世におこなはんとために、口寄者と、卜筮師と、テラピムと、偶像、およびユダの地とエルサレムに見ゆる、諸の憎むべき者を除いた。「ヨシヤの如くに心をつくし、精神をつくし、力をつくして、モーセの法に全くしたがひて、エホバに歸向せし王は、ヨシヤの先にはあらざりき。またかれの後にも彼の如き者はなし。」とある。彼もまた甚だ努めたものといはねばならない。然しながらその當時ユダは、國が衰へ、民が疲れて、最早ヨシヤが如何に努力奮闘しても、所謂一木大廈の覆へるを支へ難き状態に立至つて居つたのである。氣の毒千萬のことといはねばならない。

◎ヨシアの時代に、エジプトの王バロ・ネコが、アツスリヤの王と戦はんとて出て來ると、ヨシアが横合から出て、エジプトの王に立向うた。これは彼が自分の出る幕でもない所へ出て、その禍を招いたものにて、(歴下三五・二二)其の結果彼は、エジプト王の射手のために、傷つけられて死んだ。彼がかくして四十歳に達する前に、(列下二・二)不慮の最期を遂げたことは、彼をしてその國民の諸の災害を眼に見ることなくして、世を去らしめた。(列下二二・二〇)これをしも不幸中の幸と、いへばいふのであらうか。(二六―三〇)

◎ヨシアの亡き後、人民は彼の子エホアハズを取りて王としたが、エジプトの王バロ・ネコが之を捕虜として連歸り、その代に彼の兄エリアキムをたて、王となし、その名を改めてエホヤキムと稱へしめた。エホアハズはエジプトに至つて其處で死んだのである。かくしてユダの王は、バロ・ネコの撞に廢立する所となり、外部からの壓迫が至つて強いものがあるに引換へ、内部に於ては又、エホアハズも、エホヤキムも、

共に「その先祖等が凡てなしたるごとくに、エホバの目の前に惡をなし」つゞけたのであるから、その國勢が頽廢し、國運が極度の衰退を見るに至つたのは、止むを得ないことであつた。影の形にしたがふ如く、災禍は常に罪惡に伴ふものだからである。(三一―三七)

二四 ネブカデネザル

(列王紀略下第二十四章)

一エホヤキムの代に、バビロンの王ネブカデネザル上り來りければ、エホヤキムこれに臣服して三年をへたりしが、遂にひるがへりて之に叛けり。ニエホバ、カルデヤの軍兵、スリアの軍兵、モアブの軍兵、アンモンの軍兵をして、エホヤキムの所に攻め來らしめ給へり。即ちユダを滅さんがために之をユダに遣したまふ。エホバがその僕なる預言者等によりて

言ひたまひし言語のごとし。三この事は全くエホバの命によりてユダにのぞみし者にて、ユダをエホバの目の前より拂ひ除かんがためなりき。是はマナセがその凡てなす所において罪を犯したるより。四また無辜人の血をながし、無辜人の血をエルサレムに充したるによりてなり。エホバはその罪を赦すことをなし給はざりき。五エホヤキムとその餘の行爲と

その凡て爲したる事は、ユダの王の歴代志の書に記さるゝにあらざるや。ホエホヤキムその先祖等とともに寝り、その子エコニアこれに代りて王となれり。七却説またエジプトの王は重ねてその國より出きたらざりき。其はバビロンの王エジプトの河よりエブラテ河まで、凡てエジプトの王に屬する者を悉く取りたればなり。ハエコニアは王となる時十八歳にして、エルサレムにて三月世を治めたり。その母はエルサレムのエルサタンの女にして、名をネホシタと云ふ。九エコニアはその父の凡てなしたるごとくに、エホバの目の前に惡をなせり。一〇その頃バビロンの王ネブカデネザルの臣、エルサレムに攻め上りて邑を圍めり。一ニ即ちバビロンの王ネブカデネザル邑に攻め來りて、その臣に之を攻め惱ましめたれば、一ニユダの王エコニア、その母、その臣、その牧伯等、およびその侍従等とともに出て、バビロンの王に降れり。バビロンの王すなはち彼を執

ふ。是はその代の八年にあたり。一三而して彼エホバの家の諸の寶物、および王の家の寶物を其處より携へ去り、イスラエルの王ソロモンがエホバの宮に造りたる諸の金の器を切はがせり。エホバの言ひたまひし如し。一四彼またエルサレムの一切の民および一切の牧伯等と、一切の大なる能力ある者、ならびに工匠と鍛冶とを一萬人携へゆけり。遣れる者は國の民の賤き者のみなりき。一五彼すなはちエコニアをバビロンに携へゆき、また王の母、王の妻等、および侍従と國の中的能力ある者をも、エルサレムよりバビロンに携へ移せり。一六凡て能力ある者七千人、工匠と鍛冶一千人、ならびに強壯くして善戦ふ者、是等をバビロンの王携へてバビロンに移せり。一七而してバビロンの王またエコニアの父の兄弟マツタニヤを王となして、エコニアに代へ、其が名をゼデキヤと改めたり。一八ゼデキヤは二十一歳にして王となり、エルサレムにて十一年世を治め

たり。その母はリブナのエレミヤの女にして、名をハムタルと曰ふ。一九ゼデキヤはエホヤキムが凡てなしたるごとくに、エホバの目の前に惡をなせり。二〇エルサレムとユダに斯る事ありしは、エホバの

震怒による者にして、エホバつひにその人々を自己の前よりはらひ棄てたまへり。儲またゼデキヤはバビロンの王に叛けり。

◎こゝにはじめて、バビロンの王ネブカデネザルの名に接するのである。彼はユダを滅さん爲に神に用ひられた器として、永くその名を記憶せられて居る。神は屢々その預言者を以て、ユダの人民を警め給うたにも拘らず、彼等がその心を頑固にして、悔ゆる所を知らなかつた爲に、遂に亡國の餘儀なきに至つたのである。エレミヤ記に、「エホバ、我にいひ給ひけるは、たとひモーセとサムエル、わが前にたつとも、我がこゝろは斯民を顧みざるべし。彼等を我が前より逐ひていでさらしめよ。エホバいたまふ、汝われをすてたり。汝退けり。故にわれ手を汝のうへに伸べて汝を滅さん。われ憐憫に倦めり。(エレ一五・一、六)とある如きは、神があらかじめ、「預言者等によりて言ひたまひし言語」の一例に過ぎない。(一、二)

◎悪を行つた度毎に、柱に一つ宛釘を打ち、善を行つた度毎に、一つ宛之を抜いて、自ら戒めて居つた者がある。熱心なる努力の結果、やがて釘は大概抜いてしまふたけれども、柱に残つた釘の痕を如何ともし得ないことを、悔んだといふ話がある。それと同じ様に、マナセが犯した罪は、その晩年に至り、身を卑うして神に祈つた爲に、赦を得たのではあれど、(歴下三三・一二、一三)しかも彼がそれまでに行つた罪の影響は、前の話の釘の痕と似て、今更に、之を消すに道がなかつたのである。すなはち、「マナセが人々を誘ひて悪をなせしことは、エホバがイスラエルの子孫の前に滅したひし、國の人より、甚だしかりき。」(列下二一・九)とある通であつた。したがつてそれが、エダを滅す原因の一つとなつたのは、恐しいこと、はいねばならぬ。一人の罪が多數の人を禍し、又後世子孫にまでも累を及ぼすこと、此の如きものあるを知れば、誰も皆、油断することを許されないのである。(三、四)

◎エコニアについて、彼は「エルサレムにて三月世を治めたり。エコニアは、その父の凡てなしたるごとくに、エホバの目の前に悪をなせり」とあり。昔孔子はその弟子の顔淵を褒めて「三月仁に違はず」というた。三月の間仁の道にはづれぬ位であるから、彼の一生が如何に道にかなうて居つたか、察せらるゝのであつた。それとは反對に、エコニアは三月世を治める間、その先祖のなしたる如く、エホバの目の前に悪をなしたといへば、彼の一生を通じて、それが如何に悪に傾いて居つたかも、之を知りに難くない。此の如く人の生活の一部は、その全部を代表するものであるから、私共は日々時々、神の御旨にかなふ生活を營むことを心掛けねばならぬ。其の結果は、いつ如何なる事をして居る處を、誰に見つけられても差支なきやう、絶えず神と偕に歩んで居たきものである。(五一九)

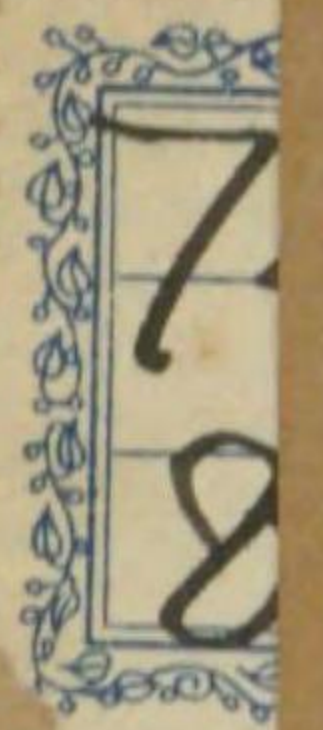
◎バビロンのネブカデネザルは、先づその軍兵をおくつて、エルサレムを圍ませておいて後、自分で出て來て之を攻撃したものと見える。エダの王エコニアは、「その母、その臣、その牧伯等、およびその侍従等」とも出て、バビロンの王に降れり。バビロンの王すなはち彼を執ふ」とあり。ネブカデネザルは又、「エホバの家の諸の寶物、および王の家の寶物を其處より携へ去り、イスラエルの王ソロモンが、エホバの宮に

造りたる諸の金の器を切はがせり。エホバの言ひたまひし如し」とあり。木は先づ内部に蝕んで後、外部からの風に吹き倒さるのである。それと同じ様に、國はその國民が内部に腐廢して後に、外部から敵國の爲に滅さるゝのが常の習である。神は前に預言者イザヤを用ひて、ユダの將來に今日あるを警め給うた。(列下二〇・一七、一八)それが到頭事實となつて、現るゝに至つたのである。(一〇一三)

◎ネブカデネザルは又、「エルサレムの一切の民、および一切の牧伯等と、一切の大なる能力ある者、ならびに工匠と鍛冶とを一萬人擄へゆけり」とあり。正確にいへば、この時より八年前、ネブカデネザルが位に即いたその年、すなはちエホヤキムの代の第三年に、一度エルサレムを攻めたことがあり。ダニエルと三人のヘブルの青年とが、捕虜として連れ歸られたのは、その時のことであつた。(ダニ一・一、六)したがつて此の度は、第二回の攻撃を加へたもので、その際捕虜として連れ行かれた者の中には、預言者エゼキエル、(エゼ一・一、二)モルテガイ(エス二・六)等も居つたやうである。彼がかくして國民の有力者を悉く連れゆいたのみならず、工匠と鍛冶と一千人を伴ひ去つ

たといふのは、その昔ペリシテ人がイスラエル人に壓迫を加へ、その國の何處にも鐵工なからしめ、その人民が劍又は槍を造ることを得ざらしめたのと、(サム前一三・一九)同じ計略によるのであつた。一言にいへば、ユダの民は武装を解除せられたのである。私共基督の軍隊に屬する者は亦、惡魔の爲にその武装を解除せられぬやう、警戒すべき筈である。エペソ書に「惡魔の術に向ひて立ち得んために、神の武器をもて鎧ふべし。」(エペ六・一二)又「神の武器を執れ。」(エペ六・一三)などあるのは、そのことである。(二四一六)

◎バビロンの王はユダの王エホヤキンを廢し、その叔父なるマツタニヤを立て、王となし、その名をゼデキヤと改めしめた。ゼデキヤとは「神の公義」を意味する。その如くユダの人民に落ち來れるあらゆる禍は、彼等の罪惡に對する神の公義のあらはれであつた。「エルサレムとユダに斯る事ありしは、エホバの震怒による者にして、エホバつひにその人々を、自己の前よりはらひ棄て給へり。」とある通である。神は愛の神であるけれども、同時に亦正義の神である。それ故人の犯せる罪を、そのまゝに見過



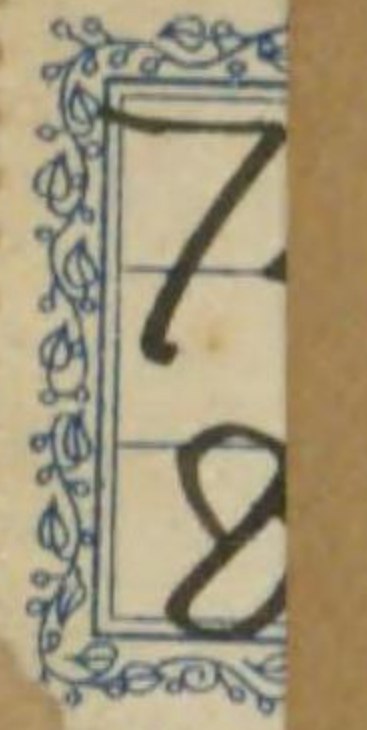
し給ふことが出来ない。使徒パウロが「それ神の怒は、不義をもて眞理を阻む人の、もろもろの不虔と不義とに對ひて天より顯る。」(ローマ・一八)というたのは、また同じことを教へたものである。畏れ且慎むべきことではないか。(一七—二〇)

二五 南朝の滅亡

(列王紀略下第二十五章)

一茲にゼデキヤの代の九年の十月十日に、バビロン
の王ネブカデネザル、その諸軍勢を率ゐてエルサレ
ムに攻めきたり、之に向ひて陣を張り、周圍に雲梯
を建て、之を攻めたり。二かくこの邑攻圍まれてゼ
デキヤ王の十一年にまで及びしが、三その四月九日
にいたりて、城邑の中饑餓すること甚だしくなり、そ
の地の民食物を得ざりき。四是をもて城邑つひに打
破られければ、兵卒はみな王の園の邊なる二箇の石
垣の間の途より夜の中に逃げいて、皆平地の途に従
ひておちゆけり。時にカルデア人は城邑を圍みな
る。五茲にカルデア人の軍勢、王を追ひゆきエリコ
の平地にて之を追ひつきけるに、その軍勢みな離れ
て散りしかば、六カルデア人王を執へて之をリブラ
に在るバビロンの王の許に曳き往きて、その罪をさ
だめ、ゼデキヤの子等をゼデキヤの目の前に殺し、
ゼデキヤの目を抉し、これを銅索につなぎてバビロ
ンにたづさへゆけり。八バビロンの王ネブカデネザ
ルの代の十九年の五月七日に、バビロンの王の臣、

侍衛の長ネブザラダン、エルサレムにきたり、九エ
ホバの室と王の室を焼き、火をもてエルサレムのす
べての室と一切の大なる室を焼けり。一〇また侍衛
の長と共にありしカルデア人の軍勢、エルサレムの
四周の石垣を毀てり。二侍衛の長ネブザラダンは
なほち邑に遺されし殘餘の民、およびバビロンの王
に降りし降人と、群集の殘餘者を擄へうつけり。三
但し侍衛の長その地の或貧者をして、葡萄を
つくる者となし、農夫となせり。三カルデア人ま
たエホバの家の銅の柱と洗盤の臺と銅の海をく
だきて、その銅をバビロンに運び、一四また銅と
火鉢と燈剪と匙および凡て役事に用ふる銅の器を
取れり。一五侍衛の長また火盤と鉢など金銀にて作
れる物を取り、一六またソロモンがエホバの室に造
りし所の二の柱と一の海と臺とを取れり。この諸
の銅の重さは量るべからず。一七この柱は高さ十
八キユビトにして、その上に銅の頂あり。その頂
の高さは三キユビト、その頂の四周に網子と石榴と
ありて、皆銅なり。他の柱とその網子もこれに同
じ。一八侍衛の長は祭司の長セラヤと第二の祭司ゼ
パニヤと三人の門守を執へ、一九また兵卒を督る
一人の寺人と、王の前にはべる者の中、邑にて遇ひ
し所の者五人と、その地の民を募る軍勢の長なる書
記官と、城邑の中にて遇ひし所の六十人の者を邑よ
り擄へされり。二〇侍衛の長ネブザラダンこれら
を執へて、リブラに在るバビロンの王の許にいたりけ
れば、二一バビロンの王ハマテの地のリブラにてこ
れらを擊殺せり。かくユダはおのれの地よりとらへ
移されたり。二三斯てバビロンの王ネブカデネザル
は、自己が遺してユダの地に止らしめし民の上に、
シヤパンの子なるアヒカムの子ゲダリヤをたて、
これをその督者となせり。二三茲に軍勢の長等およ
び之に屬する人々、みなバビロンの王がゲダリヤを
督者となせしことを聞きしかば、すちなちネタニヤ



の子イシマエル、カレヤの子ヨハナン、ネトバ人タ
ンホメテの子セラヤ、および或マアカ人の子ヤザニ
ヤ、ならびに彼らに屬する人々、ミツバにきたりて
ゲダリヤの許にいたれり。三四ゲダリヤすなはち彼
等とかれらに屬する人々に誓ひてこれに言ひける
は、汝等カルデヤ人の僕となることを恐るゝ勿れ。
この地に住みてバビロン^の王^のつかへなば、汝等幸
福ならんと。二五然るに七月に王の血統なるエリシ
ヤマの子ネタニヤの子なるイシマエル十人の者とも
もに來りて、ゲダリヤを撃ち殺し、又彼とともにミ
ツバにをりしユダヤ人とカルデヤ人を殺せり。二六

一九六
是に於て大小の民および軍勢の長等みな起ちてエジ
プトにおもむけり。是はカルデヤ人をおそれたれば
なり。二七ユダの王エホヤキンがとらへ移れたる後
三十七年の十二月二十七日、バビロンの王エビル・メ
ロダク、その代の一年にユダの王エホヤキンを獄ふ
り出して、その首をあげしめ、二八善言をもて彼を
なぐさめ、その位をバビロンにも居るところの
王等の位よりも高くし、二九その獄の衣服を易へし
めたり。エホヤキンは一生のあひだつれに王の前に
食をなせり。三〇かれ一生のあひだ、たえず日々
分を王よりたまはりて、その食物となせり。

◎ユダの王ゼデキヤがバビロンに叛いた爲、ネブカデネザルは諸軍勢を率ゐてエルサ
レムに攻めきたり、之に向ひて陣を張り、周圍に雲梯を建て、之を攻めた。尤もその
間に一度エジプトの王が兵を出して、その後を襲ふと聞いて退陣したこともあつた
が、(エレ三七・五) 又出直して來て攻撃をつゞけ、一年半に互つて攻めつゞけた故に、エ

ルサレムの人民は食盡きて、饑餓に迫つた。視よ、我エルサレムに於て、人の杖とす
るパンを打碎かん。彼等は食をはかりて惜みて食ひ、水をはかりて驚きて飲まん。斯
く食と水と乏しくなりて、彼ら互に面を見あはせて駭き、その罪に亡びん。(エレ四・
一六、一七)とは、その有様であつた。中にはその爲に父が子の肉を食ひ、子が父の肉を
食らたと、傳へられて居る。(エセ五・一〇)此の如く人はせつばつまると、往々その野獸
性を發揮して、どんなことでも、しかねないものである。それ故個人を救ふと共に、
大事なものは社會を改造し、凡ての人民が善をなすに易く、惡をなすに難き、住み心地
のよい世の中をつくることである。耶蘇が靈魂を救ふと共に、神の國を地上に打建つ
ることを、私共の本願とし、その爲に祈り、又盡すべきやう、告げ給うたのは、尤も
千萬のことといはねばならぬ。(一・一三)

◎「王の園の邊なる二箇の石垣の間の途」といふのは、敵の軍勢の心づかざる間道で
あつたと見える。城内の兵卒がみな其處から落ち行く中に、ゼデキヤもまた同じ道か
ら逃げて、エリコの平地まで逃れた所を、カルデヤ人に擄へられ、バビロン王の前に

曳出ひきだされると、バビロンの王はゼデキヤの子等こたちを彼の目の前まへにて殺ころした後、今度はゼデキヤの眼めをつぶし、之これを鎖くさりに繋つないでバビロンに携たづへ往ゆいた。多分たぶん彼は間まもなくバビロンにて客死かくししたのであらうと、いふことである。かくしてゼデキヤはバビロン王の手てから逃のがれんとして、反かへつてその手しゅ中に陥おちり、とんだ憂目うれを見ることとなつた。その如ごとく罪人つみびとは神かみの審判さばきを逃のがれんともがいても、到底たうてい及およばないのである。それ神かみの目めは人の道みちの上うへにあり。神かみは人の一切すべての步履あゆみを見みそなはず。悪あくを行おこなふ者の身みを匿かくすべき黒暗くろも無く、死陰しかげも無し。「ヨブ三四・二二、二二」神かみの審判さばきを免まぬかすべき唯一ただの道みちがあつて、それは救主すくひぬし耶穌イエスに依よりたことである。すなはち彼かれが自ら「わが言ことばをささきて我われを遣つかはし給たまひし者ものを信しんずる人は、永遠とこしへの生命いのちをもち、かつ審判さばきに至いたらず、死しより生命いのちに移うつれるなり。「ヨハ五・二四」と仰おほせられたのは、それである。(四一七)

◎バビロンの王は、その侍衛じゑいの長かネブザラダンをして、火ひをもてエホバの室いへと王わうの室いへとを焼やき、邑まちの四周まはりの石垣いしがきを毀こたしめた。殊ことにエホバの室いへの銅あかの柱はしら、銅あかの器具等きぐさう、金目かなめのものは盡こごとくく之これをバビロンに運はこんだのである。かくしてソロモン以い來らい、約やく四百二

三十年ねん、エルサレムにあつた壯麗さうれいなる神かみの宮みやは、一朝てうくわい灰燼いじんに歸きし去さつたのである。預言者げんしゃイザヤが「汝なんぢのさよき諸邑まちは野のとなり、シオンは野のとなり、エルサレムは荒廢あれたれたり。われらの先祖せんぞがなんぢを讚ほめたへたる、榮光えいこうある我儕われらのさよき宮みやは火ひにやかれ、我儕われらのしたひたる處ところはことごとく荒あれはてたり。「イザ六四・二〇、二一」というたのは、それである。或あるはその際さいエレミヤが、燃もゆる火ひの中から神かみの櫃はこを取とり出し、之これをヨルダン河かはの彼岸かなたなる、ネボ山やまの洞窟ほらに匿かくした等なごいふ傳説でんせつもあれど、當時たうじエレミヤは獄中ちゆうに在あり、さうした行動かうどうをなすべき自由じゆうを有もたなかつた故ゆゑ、信しんずるに足りないのである。今私いまわたくし共どもの身體からだは神かみの宮みやである。私共わたくしどもはその神かみの宮みやを油斷ゆだんなく保護ほごし、惡魔あくまといふバビロン人びとのために、毀こつたり、又また焼やかれたりせぬやう、警戒けいかいせねばならぬ。汝なんぢら知らずや、汝なんぢらは神かみの宮みやにして、神かみの御靈みたまなんぢらの中に住すみ給たまふを。人もし神かみの宮みやを毀こたば、神かみかれを毀こち給たまはん。それ神かみの宮みやは聖せいなり。汝なんぢらも亦またかくの如ごとし。「コリ前三・一六、一七」とあるのは、そのことを教おしへたものである。(八一七)

◎侍衛じゑいの長かネブザラダンは、祭司長さいしちやうセラヤ以下いかに六十人にんの有力者いうりよくしやを擡さらへて、バビロン王

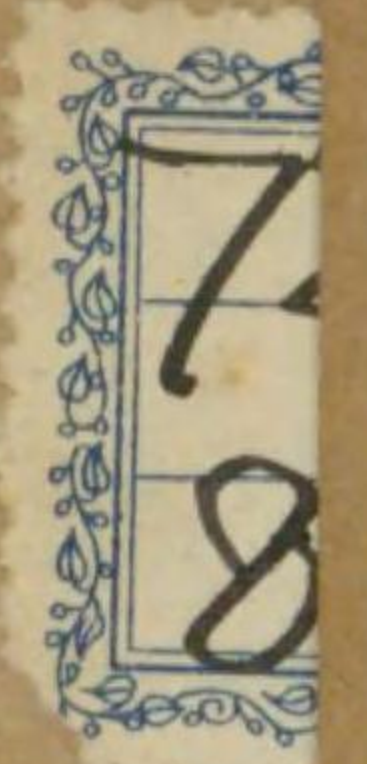


の許に至ると、王は残らず彼等を打殺した。ユダの人民は又、擄へられてバビロンに移されたのである。かくして八百六十年前、ヨシユアの指導の下に、其の先祖たちが獲得した約束の地を、今はバビロン人に剝奪せられて、其の子孫は異郷に流寓せねばならぬこととなつたのである。エホバ、汝と汝が立てたる王とを携へて、汝も汝の先祖等も知らざりし國々に移し給はん。汝は其處にて木または石なる他の神々に事ふるあらん。汝はエホバの汝を遣したまふ國々にて、人の詫異しむ者となり、諺語となり、諷刺とならん。(申二八・三六、三七)といふ預言は、如實に彼等の體驗する所となつた。しかもこれは主として彼等の背教と罪惡との結果であつた。彼等の祖先の或者等が、嘗て不信仰の爲に約束の地に入り能はざりし如く、(ヘブ三・一九)其の子孫たる彼等はまた、同じ理由によつて、約束の地から逐出さるゝこととなつたのである。(一八一・二一)

◎バビロンの王ネブカデネザルは、ユダの地に留らしめし民の上に、シャバンの子なるアヒカムの子ゲダリヤをたて、之をその總督に任じた。このゲダリヤの父アヒカムは、曾て預言者エレミヤを救うて、殺害を免れしめたやうなこともあり、眞實にユ

ダの人民の爲を思うて盡す人物であつたに、ユダの王の血統なるイシマエルが、嫉妬の爲に彼を殺すに及び、イシマエル自身はいふ迄もなく、そのほかに大小の民、軍勢の長等、みなバビロン王の怒を避けて、エジプトに逃るゝの止むなきに至つたのである。「罪人はその禍を避けんとして、反つて禍の中に飛込む」といふのは、そのことであつた。申命記に、「エホバなんぢを舟にのせ、彼の昔わが汝に告げて、汝は再びこれを見ることあらじと言ひたるその路より、汝をエジプトに曳きゆき給はん。彼處にて人汝らを賣りて、汝らの敵の奴婢となさん。汝らを買ふ人もあらじ。」(申二八・六八)とある如く、かくしてその昔、エジプトを出でたる者の子孫が、今は再びエジプトに往き、その人民に奴婢として事へねばならぬこととなつた。罪惡は何處まで人を禍にするか、ばかり知られないのである。(二二・二六)

◎ネブカデネザルが死んで、その後バビロンの王となつたエビル・メロダクは、その父ネブカデネザルが久しい以前に、獄に入れ置しユダの王エホヤキン(ヒヤヤ)を獄より出でしめ、親切な言を以て之を慰め、彼をバビロンに共に居る他の王等よりも上位に坐ら



せ、一生のあひだバビロン王の前に陪食する光榮にあづからしめた。前にエホヤキンが獄に下つた時、彼は漸く十八歳の青年であつた。(列下二四・八)それが三十七年を経、彼が五十五歳になつて後、彼は赦されて、獄を出づることゝなつたのである。それを思へば人間の一生はわからぬものである。昔ヨセフは同じく十七八歳の頃から三十歳になるまで、罪なくして配所の月を眺める身となつたが、一朝赦されて獄を出で、擧げられてエジプト一國の、大政を料理する者となつたやうな例もある。人の運命は神の御手にあり、誰も明日を豫知することが出来ないもの故、其の御慈愛を信じて心を安んずる他はない。とりわけ現在逆境に身を置き、艱難試煉の中に苦しむ者に於ては、その心掛がひとしほ大切である。「なんぢら我が名のために、凡ての人に憎まれん。されど終まで耐へ忍ぶものは救はるべし。」(マター一〇・二三)といふ御言もあるではないか。(二七一三〇)

Printed in Japan

昭和十一年十二月二十日印刷
昭和十一年十二月廿五日發行

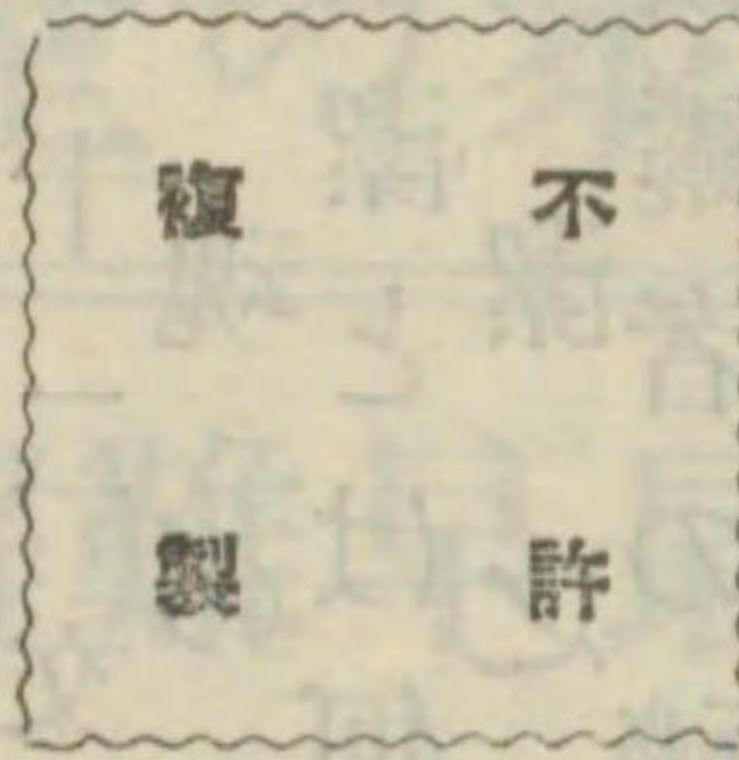
定價金九拾錢

編輯兼發行者 山室軍平
東京市神田區神保町二丁目十七番地
救世軍日本本營

印刷者 龜谷良一
東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷所 日東印刷株式會社

發行所

東京市神田區神保町二丁目十七番地
救世軍出版及供給部
(振替東京四四〇〇番)



78

民衆基督教叢書

山室中將著

十五版 勞働の宗教的意義 【定價十錢】

勞働問題を云々する人は世に頗る多い。然し是れを單に經濟問題としてのみ取扱ふ所に、満足なる解決はない。此の書は神聖なる勞働問題を敬虔なる宗教の立場から説いたものである。

二十版 聖書の感化力 【定價十錢】

此の書を読み、聖書の偉大なる感化力に驚嘆せぬ者はない。實例を豊富に網羅してある。これを讀めば聖書が讀みたくなり。聖書を読めば、これが讀みたくなる。

十六版 基督教と日本人 【定價十錢】

政治界、實業界、教育界、人道界、宗教界、婦人界の各項に分ちその基督教信者を擧げて、簡潔にその信仰と人物とを紹介したるもの。是非これを讀まれない。

二十版 病床の慰安 【定價十五錢】

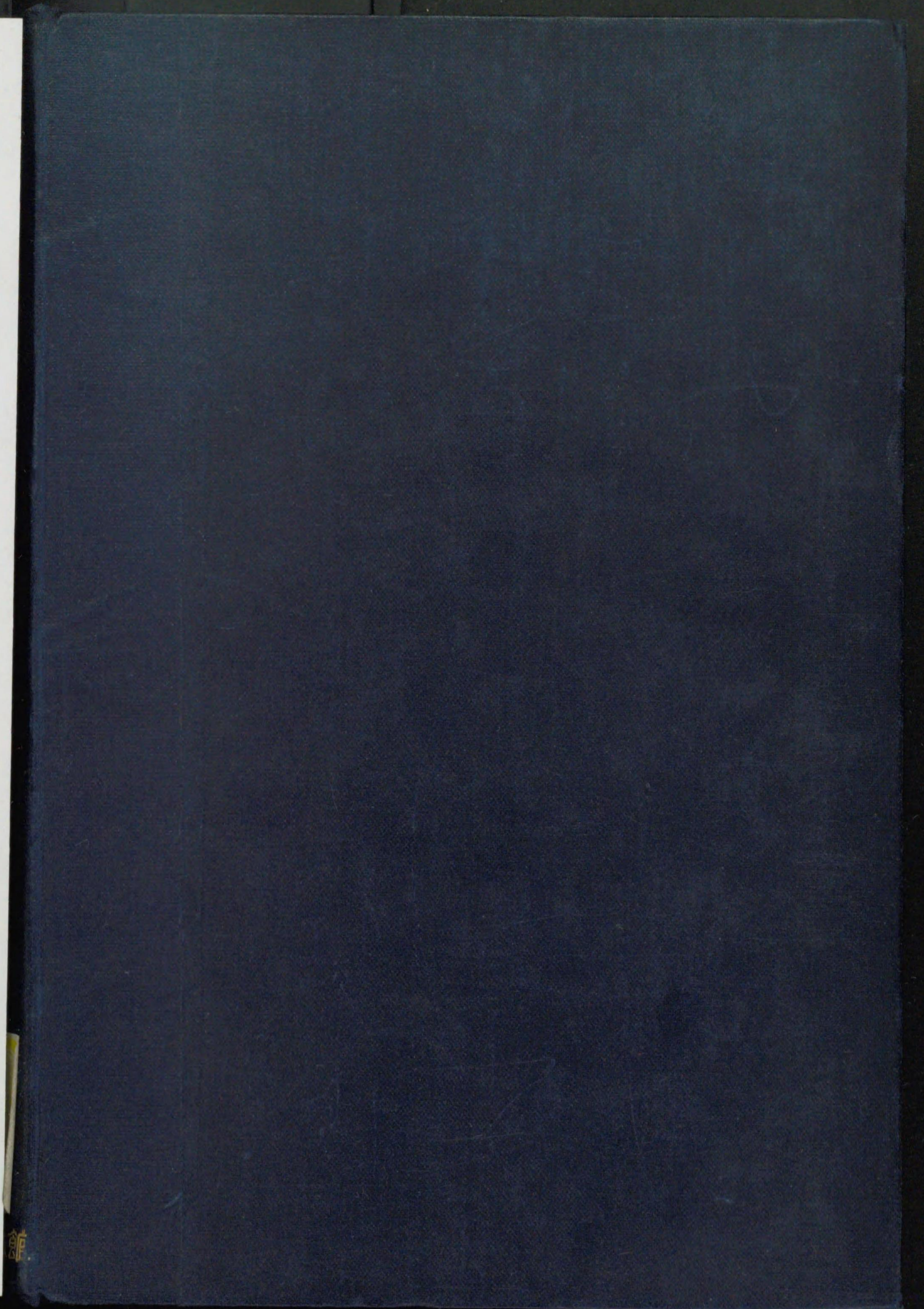
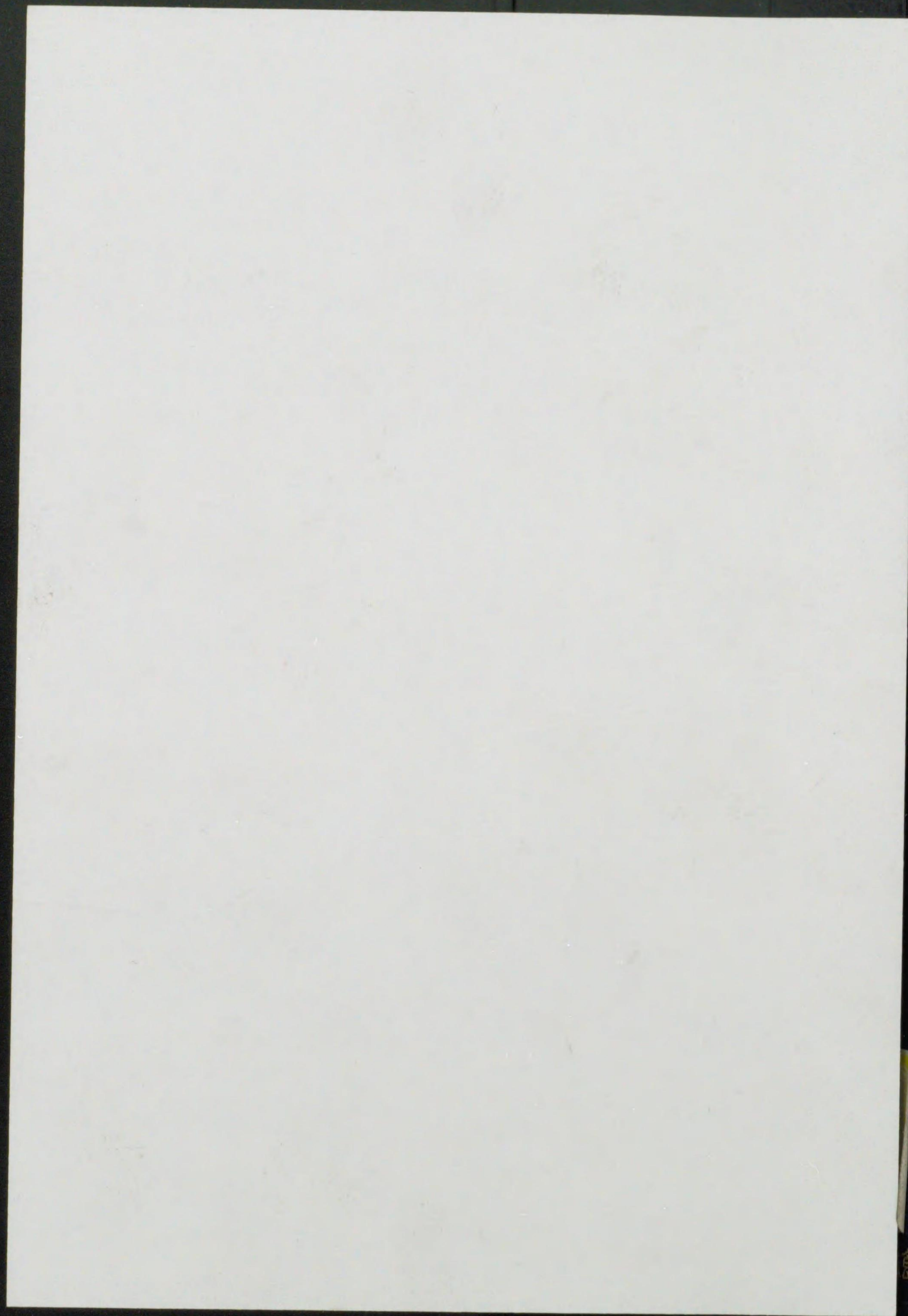
病氣は人生の重荷である。然しこれを讀めば重荷でなくなる。知己友人の間に病人があつたとしたら、是れを贈らねたい。これに優る見舞品はない。

78

山室中將
聖心之感化力
日本人心
病床の慰安

7
8

724
86

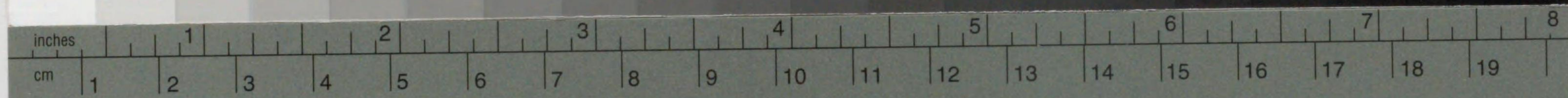


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

